



博士 (人間科学) 学位論文 概要書

身体障害者のリハビリテーションにおける
作業活動と社会生活再構築に関する研究

2001年7月

早稲田大学大学院人間科学研究科

遠藤 てる

指導教授 加藤 清忠

要旨

I. 研究目的

本研究では、障害者のリハビリテーションに携わる専門領域の一つである作業療法の治療・援助の方法である作業活動と、障害を持ちながら社会生活が再び送れるように支援していく過程について検討した。作業療法が欧米より日本に導入されてその歴史が比較的浅い。従来の欧米式方法には問題点が多く指摘される。そこで、日本人の生活や文化に基盤を置いたより日本人に合った作業活動の内容や方法を開発することが求められる。本研究では障害の回復または軽減を図り、あるいは障害者が障害を持った状態で生活する方法を獲得して社会に再適応していくための治療・援助について作業活動の視点から検討する。

II. 脳卒中片麻痺者の生活障害評価と作業活動についての検討

脳卒中片麻痺者において日本人の生活に不可欠な作業活動について生活障害を引き起こしている要因の評価と患者の生活障害の改善あるいは社会復帰のために用いる方法の検討および検証をした。サンディング作業では、実験の対象とした回復段階の片麻痺者に対してはこの作業活動に加え他の作業活動をより積極的に用いる必要が示唆された。また、健常者における実験の結果からより回復段階の高い片麻痺者に応じた方法が考えられた。書字活動では、片麻痺者の動作は末梢の動きが少なく、より中枢側を使用しており動作の変化に対応して筋肉を上手に使えないことが明らかになった。その結果、書字速度および筆圧、正確さにおいて劣っていた。このことは片麻痺者の非麻痺側上肢の巧緻動作の特徴とも考えられた。これらの

検討の結果を踏まえて日常生活を送る上で実際に必要な書字練習の方法が示唆された。手工芸を用いた作業遂行検査については、この検査で示された能力と日常生活活動能力には相関がみられた。手工芸を用いた作業遂行検査は片手使用の片麻痺者が日常生活活動の遂行上必要とされる新しい課題の学習能力の要素、達成時間の要素、完成度の要素を検査できることを明らかにした。また、この検査は日常生活活動能力の改善を予測できる可能性が示唆された。職場復帰における作業活動については、職場復帰に必要な達成目標の3条件を挙げ、作業活動を用いた訓練・評価方法を提示した。過去6年間にこの訓練を受け職場復帰した者について追跡調査をした。その結果、全員が勤め続けておりこの方法は効果があったと考えられた。職場復帰に影響を与える共通の要因は見いだせなかったがこの達成目標の3条件は職場復帰には不可欠であることを明らかにした。

Ⅲ. 身体障害者の在宅生活再構築についての検討

多くの身体的、心理的、社会的な課題を重複して持つ身体障害者が在宅生活を送れるように支援を行う福祉領域におけるリハビリテーションについて検討した。地域福祉に重点が置かれ早期の社会復帰を求められている日本の福祉施設の現状がある。短期間の支援により利用者の社会復帰を可能にしているある肢体不自由者更生施設の支援活動について検討した。支援活動の概要および利用者の障害の状態と変遷について分析した。この現状に対応して実施している支援活動プログラムについて検討した。多職種職員によるチームワークおよび社会生活上での課題の解決、医療機関との連携、障害受容などが支援プログラムを構築していく上で重要であることが明らかになった。ついで支援の困難な高次脳機能障害を合併した身体障

害者の事例について、長期間の入院生活後この福祉施設で支援を受けて在宅生活を再開できるようになった経過を検討した。この援助の過程では本人および家族の障害への理解の促進を図り、ケースワーカーに情報を集中させながら多職種の職員間で綿密なチームワークにより援助を行ったことが本事例の家庭復帰を可能にしたと考えられた。

IV. 身体障害者に対する作業活動アプローチについての検討

作業活動を身体障害者のリハビリテーションに適用することに関して3種類の作業活動を取り上げ検討した。伝統工芸である組みひも作業については、身体障害者が使用しやすいように考案した方法を用いて、高次脳機能的側面と作業遂行機能的側面から分析し、評価と治療・援助の方法を示した。そして、本作業を用いることの有効性を事例により具体的に示した。炊事活動については、欧米とは異なる日本的様式の炊事活動の特徴を挙げ、作業活動分析を行い、身体障害者への援助方法と安全に炊事を行うための援助上の留意点を明らかにした。機械操作活動では、身体障害者の事例について電動車椅子およびワープロが障害受容に与えた影響について考察し、その理由として機械の持つ特性と既に使用した機械であったことによることを明らかにした。

V. 結語

本研究で明らかになった結果を総合的に考察し、今後に残された課題を集約した。